

学校不適應を予防するための試み —高校メンタルヘルス調査からみえたもの—

肥田幸子
鈴木美樹江

目次

- I. 問題と目的
- II. 方法
 - 1. 生徒に対するメンタルヘルス調査の実施
 - 2. 担任教員に対するフィードバック資料の作成
 - 3. メンタルヘルス調査に対する教師の評価調査
- III. 結果
 - 1. 質問紙の有効性に関する検討
 - 2. 質問紙項目と教師の問題意識
 - 3. 各担任教員の反応に関する検討
- IV. 考察
 - 1. 尺度に関する考察
 - 2. 教師はどのような生徒に問題があると感じているか
 - 3. 各担任教師の反応格差について
- V. 結びと今後の課題

I. 問題と目的

近年、学校における子どもたちの心理的不適應の現状は大きな社会問題となっており、その解決は喫緊の課題である。文部科学省の平成19年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」によれば、高等学校における中途退学者は72,854人で、在籍者数に対する割合は2.1%、不登校は53,041人で1.56%を占める。また、中途退学事由の内、「学校生活・学校不適應」は38.8%であった[1]。

私立A高等学校（愛知県N市）においても平成19年度の総不登校者数、学年別、中途退学者

数は表1のようになる。中途退学率は1.3%で、全国平均の2.1%（文部科学省、前出）より低いが、20名以上が退学している。

表1 平成19年度私立A高等学校の不登校、中途退学者数

	1年生	2年生	3年生	総数
中途退学者	10人	3人	8人	21人

なかでも1年次の中途退学者数が多いことに注目した。初年度に中途退学者が最も多い現象は上記、文部科学省の調査でも明らかにされている。また、中途退学事由としては学校生活・学業不適應が最も高く、1年次での学校不適應生徒に対する対策は特に重要な意味をもつといえる。

これらの背景から、私立A高等学校1年生に対し、第2次予防介入のプログラムを実施した。

予防は第1次予防（問題の発生を事前に予防）、第2次予防（問題の増加を阻止）、第3次予防（問題発生による被害からの回復）という3つの段階に分けることができる[2]。学校メンタルヘルスにおいては、第1次予防介入とは生徒、教職員を含むすべての構成員がメンタルヘルスに関する知識を深め、学校不適應を作らないような環境を作ること。第2次予防介入とは不適應状態に陥った、あるいはその可能性

のある生徒を早期に発見し、介入・ケア等の適切な処置を行うことで、問題を重症化させない。第3次予防介入とは問題が表面化した生徒の治療や連携による支援、あるいは復帰した生徒の問題再発を防ぐことであると考えられている [3]。ことに第2次予防介入の重要性に関して米国では、130の第2次予防プログラム研究について、メタ分析にて評価した結果、プログラム参加者の平均値は、受けていない統制群と比べて、約70%成績が上回っていたとの報告もある [4]。

私立A高校における、2009年度メンタルヘルス第2次予防実施計画は、メンタルヘルス調査を行い、分析結果を担任にフィードバックすること、それをきっかけとして担任とカウンセラーのコミュニケーションを増やすことを目的とした。具体的には図1のように行われた。

今回のメンタルヘルス予防介入では、要支援になる可能性をもつ生徒たちを早期に知ることができ、同時に、教員からはすでに問題行動が

見えている生徒の情報を得ることができた。今後、この資料を基に、教員、保健室、カウンセラーは連携して、生徒のメンタルヘルス予防に貢献できると考える。私立A高等学校におけるメンタルヘルス予防システム構築の1歩を踏み出したといえるであろう。しかし、これを今後を生かすためにはいくつかの問題を精査し、改良を加えていかなければならない。

本論文では、今回のメンタルヘルス予防活動から得られたデータを明らかにしながら、以下のことに焦点を当てて検討した。質問紙調査の有効性の問題、すなわち、今回の調査のために構成した質問紙が要支援生徒をどの程度正確に拾い上げることができたかである。

次に、生徒が困難と感じている項目の何が表面化し、教師が何を問題と感じているかである。

質問紙調査で現れるものは生徒個人の内的問題意識であり、現在、表面化している問題点と必ずしも一致するとは限らない。まずはその違いがどのようなものかを把握した。

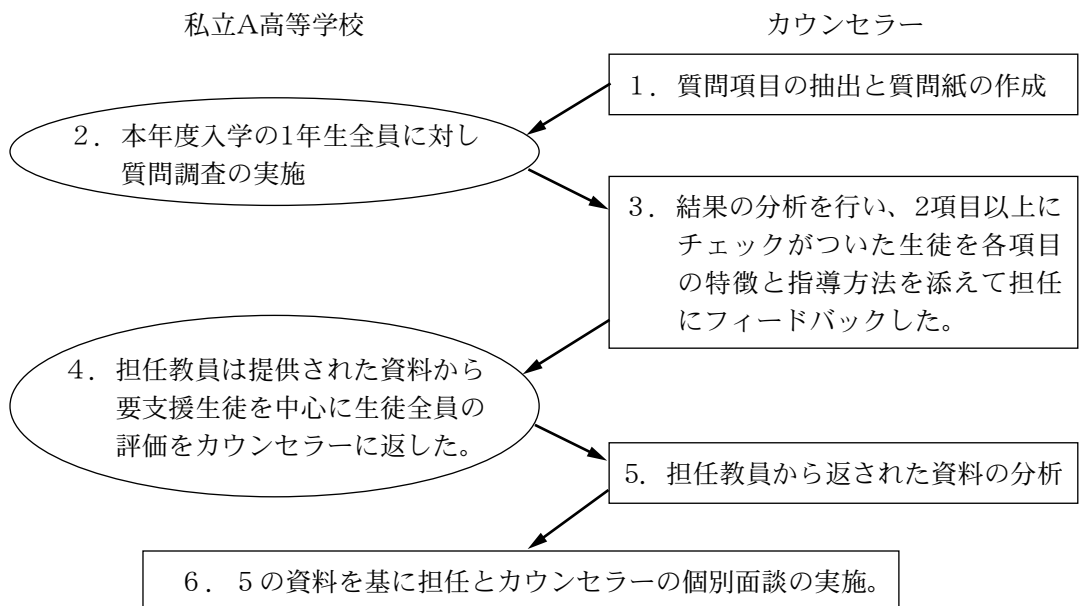


図1 2009年度メンタルヘルス2次予防介入

最後に、この予防介入が教員との連携向上に寄与しているかという点である。生徒のメンタル面での支援において、教員とカウンセラーの連携は欠かせない。しかし、その認識においては教員差があり、接点をもてない教員も多かった。その現状を明らかにし、今後の方向性を検討した。

Ⅱ. 方法

1. 生徒に対するメンタルヘルス調査の実施 調査対象者

スクールカウンセラーをしているN市私立A高校の1年生594名（男子313名、女子281名）を対象として、メンタルヘルス調査を行った。

調査時期

2009年5月、担任教師によるクラス一斉方式で実施された。また、メンタルヘルス上の問題を早期に発見することを目的に行ったため、各生徒の回答を特定する必要があった。そこで、調査の主旨や守秘に関する説明をした上で、出席番号・名前の記入と回答を求めた。

調査内容

質問紙は以下の尺度を用いて、メンタルヘルス調査を実施した。

(1) **Child Rating Scale**日本語版：鈴木(2009)がHightower et al. (1987)の作成したChild Rating Scaleを本訳したものである [5] [6]。「学校への関心」、「規則に従う力」「友人関係能力」「不安」の4つの尺度が各6項目からなり、計24項目から構成されている。各尺度のうち、本研究において使用したのは以下の項目数である。「学校への関心」「友人関係能力」「不安」においては各4項目、「規則に従う力」においては5項目を採用した。

(2) **基本的信頼感尺度**：谷(1996)が、Erikson (1959)の「基本的信頼対基本的不信」を測定するために作成した尺度である。「基本的信頼感」は6項目から構成されており、本研究ではその中から4項目を採用した [7] [8]。

(3) **自尊感情尺度**：山本・松井・山成(1982)による自尊感情尺度 (Rosenberg,1965)の日本語版で、10項目からなる。本研究においては4項目を採用した [9] [10]。

本研究においては以上の「学校への関心」「規則に従う力」「友人関係能力」「不安」「基本的信頼感」「自尊心」の6尺度合計25項目において質問紙を作成した。(資料1)

なお、回答項目は「当てはまらない」「やや当てはまらない」「やや当てはまる」「当てはまる」の4件法を用いた。

2. 担任教員に対するフィードバック資料の作成

要支援生徒抽出基準 要支援生徒を抽出するために、上記で構成されたメンタルヘルス調査の各尺度のM-SD値以下の生徒を各尺度の低得点者とした。なお本調査対象者となった全生徒(594名)の各変数における平均得点と標準偏差、低得点者人数を表2に示す。

表2 本調査対象生徒594名における各変数の平均得点

尺度名	標準偏差, 低得点者人数			
	M	SD	M-SD	低得点者人数
自尊心	2.43	0.62	1.80	97人
学校への関心	2.71	0.52	2.19	76人
不安のなさ	2.83	0.44	2.39	82人
友人関係能力	2.98	0.40	2.58	97人
規則を守る力	2.52	0.37	2.15	67人
基本的信頼感	2.67	0.69	1.98	74人

1年生担任教師、保健体育主事担当教師、養護教諭に対して、メンタルヘルス調査票の見方とクラス毎の生徒の各尺度得点、カウント数を一覧とした資料を配布した。その際に、各尺度のM-SD以下の得点を“注意を要する得点”と

して該当する生徒は太字で示すと共に、その注意を要する得点が6尺度中いくつの尺度で該当したかについてチェックしたカウント数も載せた（表3）。

表3 メンタルヘルス調査の見方の一例

肥田幸子
鈴木美樹江

本調査は生徒自身が発している心のSOSを関知するための調査です。値が赤くなっている生徒は、該当する領域において外の生徒より、不安定であることを意味しています。また該当する生徒への対応の仕方については、次のページに記しましたので、ご参考にして下さい。

クラス	番号	自尊心	学校への関心	不安のなさ	友人関係能力	規則を守る力	基本的信頼感	カウント
-----	----	-----	--------	-------	--------	--------	--------	------

個人を特定する出席番号

自尊心、学校への関心、不安のなさ、友人関係能力、規則を守る力、基本的信頼感の項目のなかで、低い特徴（赤い数字）がいくつあったかについて示したものです。
この数字が大きい生徒は要支援生徒である可能性があります。

値が低いほど、不安定さを示します。

なお、本研究では、2つ以上の尺度で“注意を要する得点”となった生徒を“心の支援が必要な生徒（要支援生徒）”として操作的に定義し、抽出を試みた。

また、“注意を要する得点”に該当した場合、

どのように生徒に対応したらよいかについての働きかけの視点についてまとめた文章についても共に配布した。対応表については表4に示した。

表4 各因子における注意を要する生徒への対応方法の一例

自尊心が低い生徒への対応

- ・自分の気持ちや思いを伝え、受け止める経験を多く持てるように援助する必要があります。
- ・先生から声をかけていただき、自分の気持ちを言う機会を増やし、受け止めてもらう機会を増やしてあげてください。そのうえで「よく頑張っているな」など言葉をかけていただけたらと思います。

学校への関心が低い生徒への対応

- ・学校生活までエネルギーが持てていない可能性があるため、生活習慣など気にかけていただけたらと思います。
- ・友人関係、家庭生活、学業などなんらか息詰まっている可能性があるため、何に本人は抵抗があるのかを把握していくことが大切になってきます。

不安が高い生徒への対応

- ・悩みや不安などが身体化する可能性が高い生徒です。
- ・顔色や体調を気にかけていただいて声をかけてください。また、何か悩んでいる様子が見られたら、「何か悩んでることあるのかな？」と声かけをお願いします。
- ・必要な場合は、相談室において個別の援助を行っていきます。

友人関係能力が低い生徒への対応

- ・生徒のどのような点が友人関係を築く際につまずく原因になっているのか、見ていただき、生徒に助言をして、少しずつスキルが獲得できるように援助をしていただけたらと思います。
- ・また先生から見られて、明らかに集団の中で浮いている生徒の場合、軽度発達障害を有していることも考えられますので、相談室とも連携いただければと思います。
- ・疎外感や孤立感を感じている生徒が多いため、必要に応じて相談室の利用も促していただければと思っています。

規則を守る力が低い生徒への対応

- ・言葉で気持ちを十分表現できていなかったり、自分の衝動をコントロールすることが難しい生徒が多いのが特徴です。
- ・何か問題が生じたときや日常場面でも、現在の気持ちや思いなどを聞いていただき、自分の思いを行動ではなく言葉にしていけるように援助をお願いします。
- ・また衝動性の高い生徒の場合は、何か問題が生じた後にどのようなことで腹が立ったのかできるだけ言葉で表現できるように促してください。そして、怒れる気持ちや苛立つ気持ちを感じたときは、人に話したり、気持ちを切り替えるなど適用的な方法を教えていただければと思います。

基本的信頼感が低い生徒への対応

- ・今まで自信を持てる体験をしてきていない可能性がある生徒さんです。
- ・高校生活で何かひとつ自信をもてることを探せるように援助していただければと思います。
- ・他者不信感が強い場合、家庭が不安定だったり、過去の友人関係で辛い経験があった可能性が高いため、家族との連携を強化していただいたり、友人関係を見守っていただく必要があります。

3. メンタルヘルス調査に対する教師の評価調査

上記で抽出された要支援生徒について、日常生活の中で、担任教師がどのように生徒を捉えているかについて検討するために質問紙調査を実施した。実施時期は、メンタルヘルス調査から約1ヶ月経過した2009年6月であり、対象は1年生を担当している教師15名であった。質問内容は①クラスの該当した要支援生徒に現在のところ問題がみられているかどうか、②要支援生徒に該当しなかった生徒で問題行動がみられている生徒について回答を求めた。なお、回答項目は「問題がある」「やや問題がある」「ほとんど問題がない」「問題がない」の4件法を用いた(資料2)。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙の有効性に関する検討

①要支援生徒における検討

担任教師は、各尺度から抽出された要支援生徒143名の生徒に対して、問題があると感じているかどうかについて分析をおこなった。その結果を、表5と図2にまとめた。生徒のあげた問題意識の中で、友人関係能力のなさは高いパーセンテージで教師も同じ問題があると見ていることがわかる。

表5 調査で抽出された要支援生徒群の問題の有無に関する生徒数

要支援生徒	問題はない	ほとんど問題はない	やや問題がある	問題ある
自尊心の低さ	23	21	15	1
学校への関心のなさ	23	17	10	3
不安が高い	22	15	13	2
友人関係能力のなさ	16	12	19	5
規則を守る力のなさ	24	11	5	2
基本的信頼感のなさ	23	15	10	4

*数値は各尺度における要支援生徒の人数を示す

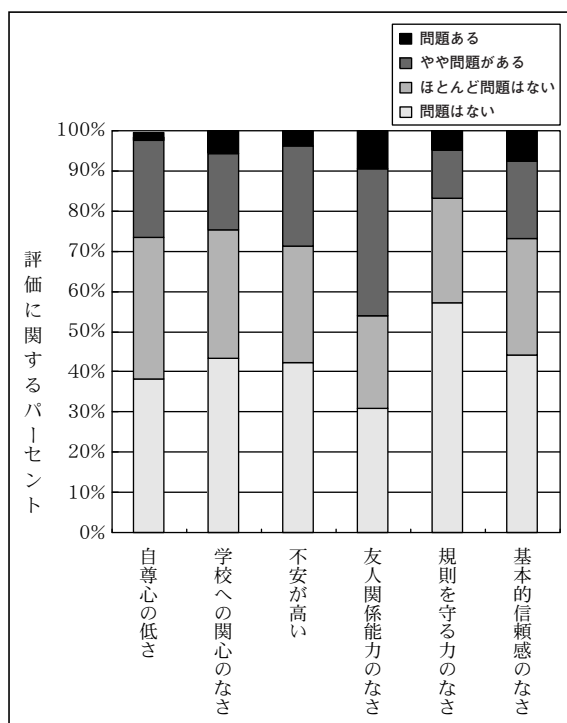


図2 調査で抽出された要支援生徒群の問題の有無パーセント

②全生徒における検討

教師が問題あると思った生徒と教師が問題ないとした生徒との比較を行うため、メンタルヘルス調査の変数である自尊心、不安のなさ、友人関係能力、学校への関心、基本的信頼感得点において、問題あり群と問題ない群との間でt検定を実施した。

本調査での教師が問題があるとした生徒の定義は、メンタルヘルス調査の評価表において、教師が問題があるとして取り上げた生徒を示す。教師が問題ありとした生徒は77名、問題がないとした生徒は517名であった。

その結果、学校への関心においては0.1%水準で有意差が検出された。また、不安のなさ、基本的信頼感、人関係能力は1%水準で有意差が、自尊心、規則を守る力においては、5%水準で有意差が認められた。このことから、教師が問題ありとした生徒の方が教師が問題ないとした

生徒よりもメンタルヘルス調査得点が低いことが示された（表6）。

表6 全生徒における問題あり群とない群の各変数の平均と標準偏差

	問題あり群	問題ない群	t値
自尊心	2.2(.83)	2.46(.58)	2.62 *
学校への関心	2.39(.56)	2.76(.50)	5.97 ***
不安のなさ	2.64(.55)	2.86(.42)	3.42 **
友人関係能力	2.81(.55)	3.03(.35)	3.37 **
規則を守る力	2.39(.44)	2.54(.35)	2.83 *
基本的信頼感	2.38(.77)	2.71(.66)	3.56 **

※()内は標準偏差 *** p<.001, ** p<.01+p<.10

2. 質問項目と教師の問題意識

教師が問題があると見た生徒に影響する変数が何かを探るため、問題の有無を従属変数とする重回帰分析をおこなった。R²は.09で0.1%水準で有意であり、独立変数の中で学校への関心 ($\beta = .17, p < .001$), 友人関係能力 ($\beta = .12, P < .01$) や不安のなさ ($\beta = .08, P < .05$) が教師の問題があるととの評価に影響を与えていた。

表7 教師から見た問題の有無を従属変数とした重回帰分析の結果

従属変数：問題有無	標準偏回帰係数
独立変数	
自尊心	0.030
学校への関心	0.166***
不安のなさ	0.077 ⁺
友人関係能力	0.118**
規則を守る力	0.044
基本的信頼感	0.066
決定係数	0.092***
重相関係数	0.303
N	594.000

※()内は標準偏差 *** p<.001, ** p<.01, +p<.10

3. 各担任教員の反応に関する検討

教員から返された要支援生徒チェックリストにおける担任格差の大きさを検討した。的中率の度数分布（図3）から大きく3つのかたまりになっていることが分かる。最も多い31～40%から最高の70%台に向かっては徐々に少なくなっているが、極端に低い一群が離れて存在することが明らかになった。その後、設定されたカウンセラーとの個別面談も2名の教師が必要ないと回答した。

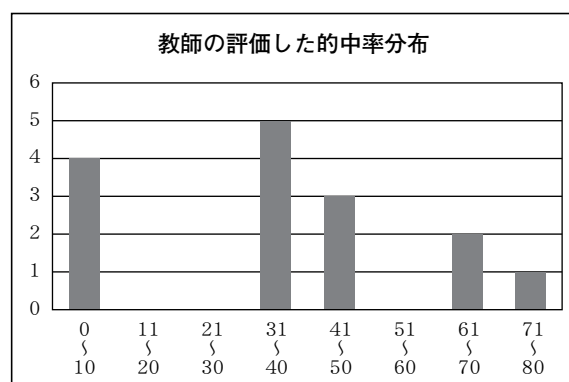


図3 各担任教師の評価した的中率の分布

IV. 考察

1. 尺度に関する考察

図1で示すように「友人関係能力のなさ」では、質問紙で抽出された生徒の半数近くに問題があると教師は指摘しており、有効な質問項目であったと考えられる。友人関係というのは見えやすい指標であり、現実に友人関係がうまくいっていないことと、本人が友人関係の能力がないと感じるところに差がでない項目であろう。また、学校においての友人関係については学校不適応との関連が強いといわれており[11]、不登校に移行するケースも多く、重要な指標であると考えられる。

全生徒における問題あり群となし群の対比は、表6の結果よりすべての項目において有意

差があると認められた。つまり、今回の質問紙6尺度は生徒の適応状態を客観的にあらわす尺度として有効であったことが明らかにされた。

ただ、有意差が最も高かった「学校への関心」という尺度は学校への好感度つまり適応度そのものを聞いているとも考えられる。その中には友人とうまくいっているや、学校に不安がない、学習がうまくいっているなどが要素として含まれる。佐藤（2007）は自己への信頼感の低さは勉学に対する意欲の低さにつながると述べており、基本的信頼感と勉学はつながっているといえる [11]。つまり、「学校への関心」は「友人関係能力」「不安のなさ」「基本的信頼感」を含む指標であるともいえる。今後、質問紙の尺度選択において考慮する必要がある。

2. 教師はどのような生徒に問題があると感じているか

要支援にあげられた生徒だけでなく、全生徒のなかで、教師が問題ありとした生徒はどのような尺度と関連があったかを検討した。表7の結果が示すように、教師が問題があると回答したものは「学校への関心」「友人関係能力」「不安のなさ」の影響が高く、「自尊心」「規則を守る力」「基本的信頼感」においては有意な影響差は認められなかった。この結果から、教師が問題ありと捉えている側面は、学校生活で行動面などから表面化しており、察知しやすい側面といえる。生徒自身が自分の弱点と考えている問題、つまり、個人の内的問題意識については教師が察知しにくいと考えられる。教師が生徒の行動を見て問題があると感じる外的問題と本人の内的問題意識とのあいだにはズレが生じるのではないか。内的な問題意識、ことに「自尊心」「基本的信頼感」は現在問題が生じていなくとも今後のメンタルな問題につながっていくことが危惧される。沖ほか（2000）は高校生

のメンタルヘルスに関する縦断的研究のなかで、1年生の時に心理的な問題をもっていない生徒も、2年生になればそうでない場合があると述べている [12]。継続的なフォローが必要とされるであろう。

3. 各担任教師の反応格差について

学校における教育相談の歴史は、立場の違う教師とカウンセラーの相補性から出発している [13]。しかし、学校現場内では、今でも、カウンセラーは生徒を甘やかすと考えている教師は多い。実際に私立A高等学校においてもカウンセラーと全くコミュニケーションのとれていない教師が3割程度は存在する。今回の調査においても図3で示すように的中率の0%~10%とした教師が4人いた。このような調査の場合、的中していないという回答はある程度は出るが、おおよそは正規分布を見せる。しかし、今回のように極端なかたまり方を示す分布は、何らかの教師の恣意的な意志が働いた結果であるとも推測される。このクラスの生徒においてはメンタルヘルス予防に踏み込めない可能性も憂慮される。今後、何らかの接点を見いだし、信頼を得ていくことが課題となるであろう。

V. 結びと今後の課題

生徒への質問紙調査と教師の評価、それをもとにした教師とカウンセラーの面談を行うことで、一年生の学校不適応を減らそうという試みであった。今後、更に時間の経過をもつことにより、明らかになってくる点もあると思われるが、ここでは方略について検討を加えた。

まずは学校不適応になる可能性のある潜在的な群を拾い上げる質問紙を作成した。今回使用した質問紙の尺度は、ある程度は生徒の適応状態を現していることが明らかになった。次に、教師から見えやすい尺度とそうでない尺度があ

ることが分かった。これについては自己評価式の質問紙がどの程度現実を正しく評価できるかという点の考慮が必要となる。

谷井、上地（1994）は生徒の適応感は適応そのものを意味する概念ではないが個人の適応の1指標として考えることは可能であろうと述べている [14]。ただ、自己評価式であるため自分を客観視することの苦手な生徒、あるいは適応的であるのに内省的で自己批判の強い生徒の回答は実態とずれる恐れがある。また、教師の観察は現在の不適応状態は正しく把握できるが、生徒の内面や将来の問題についての予測は難しい。

今回の調査研究から、有益な二次予防介入には単に質問紙調査でアセスメントを行うだけでなく、バウムテストなどの調査者が全体を俯瞰して判断できる方法との組み合わせも検討する必要があることが推察された。

そして、北神他（2008）は「チェックリスト運用体制の開発」のなかで、その結果を考慮に入れた学校現場で利用可能で有益な情報としてフィードバックの方法を考察することと述べている [15]。有益な情報となるためにはハード面での質問紙の精度の良さと、ソフト面での教師とカウンセラーのより良い連携が必要となる。後者では、教員へのフィードバックの工夫と丁寧なコンサルテーションがその基本となるであろう。今回、9月に13名の教師と個別面談を行った。その内容分析は未だ途中であるが、個別に話が出来たことで、親近感がわき、相互理解が進んだ。教師対カウンセラーの構図は、教師A対カウンセラーBという個人の関係へと置き換えることができた。今後の、連携の1歩を踏み出したといえるであろう。そして、その連携は保護者、医療機関、社会資源などを巻き込んだ幅広い連携へ発展して行けると考える。

現在は発達障がいおよび発達障がい傾向をも

つ生徒への対応が問題とされることが多い。発達障がいを学校でスクリーニングすることには困難があり、また、該当者の抽出のみが大きな意味を持つとは考えられない。問題は発達障がいそのものよりそれによる2次障害の結果が学校不適応につながる人が多いといわれている [16]。2次障害によって起こる学校不適応は今回のような予防介入でも十分に対応が可能であると考ええる。質問項目の精査、担任教員との連携の工夫など、今後の改良によって、より広い範囲の不適応にも対応が可能になると考える。

今後は、質問項目をより精査することが必要である。今回は触れなかったが、有効な実施時期の検討、連携のためのシステム作りなどいくつかの課題も残っている。しかし、今回A高校に行った一連の2次予防介入は学校不適応防止のための大きな第1歩であり、その手法に多くの有効性があることが明らかにされた。

引用文献

- [1] 文部科学省「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」2008
- [2] Caplan G 予防精神医学 新福尚武監訳 朝倉書店 1970
- [3] 石隈利紀 学校心理学 誠信書房 p144. 1999
- [4] Durlak, J. A. & Wells, A. M. 1998 Evaluation of Indicated Preventive Intervention (Secondary Prevention) Mental Health Programs for Children and Adolescents, American Journal of Community Psychology, Vol.26,5, p775-802.
- [5] 鈴木美樹江・川瀬正裕 CRS (Child Rating Scale) 日本語版の試み 日本教育心理学会第51回総会発表論文集 p300.
- [6] Hightower, A.D. Cowen, E. L., Spinell, A. P., Lotyczewski, B. S., Guare, J.C., Rohrbeck, C. A., & Brown, L.P. The Child Rating Scale: The development and psychometric refinement of socioemotional self-rating scale for young school children. School Psychology Review, 16, p239-255. 1987
- [7] 谷冬彦 青年期における基本的信頼感と時間的

- 展望 発達心理学研究 第9巻 p35-44. 1996
- [8] Erikson, E.H. Identity and the life cycle. New York: W. W. Norton & company. 1959
- [9] 山本真理子・松井豊・山成由紀子 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 第30巻(1) p64-68. 1982
- [10] Rosenberg, M. Society and adolescent self-image. Princeton Univ. Press. 1965
- [11] 佐藤寿仁・菅原正和 中学生における学校不適応と信頼感に関する研究 岩手大学教育学部付属教育実践総合センター研究紀要 第6号 p207-216. 2007
- [12] 沖郁子・藤生英行・杉原一昭・熊谷恵子・山中克夫 高校生のメンタルヘルスに関する縦断的研究 筑波大学学校教育論集 第23巻 p28. 2000
- [13] 栗原慎二 新しい学校教育相談のあり方と進め方本の森出版 2002
- [14] 谷井淳一・上地安昭 高校生の学校不適応感と彼らの親の自己評定に基づく親役割行動の関係 42 p185-192. 1994
- [15] 北神正行・高木亮・山崎克麿・原範幸 公立中学校および適応指導教室におけるチェックリスト運用体制の開発 I 岡山大学教育学部研究集録第137号 p143-152. 2008
- [16] 井上善之・窪島努 発達障害に背景をもつ学校不適応に関する研究 滋賀大学教育学部紀要 教育科学 58 p53-61. 2008

肥田幸子

愛知東邦大学 人間学部人間健康学科
専任講師 学生相談室相談員

鈴木美樹江

愛知東邦大学 非常勤講師、学生相談室
相談員
愛知県スクールカウンセラー
金城学院大学 非常勤講師

受理日 平成21年9月30日

資料1. 質問紙

★質問をよく読んで、自分に一番あてはまるものに○をつけて下さい。正しい答えや間違った答えはありませんので、ありのままにできるだけ正直に答えてください。あまり考え込まずに、はじめにおもった通りに答えてください。

回答項目： 1. 当てはまらない 2. やや当てはまらない 3. やや当てはまる 4. あてはまる

1. 自分は色々な良い要素を持っている。
2. 学校に行くのはもううんざりだ。*
3. 学校で勉強するのが好きだ。
4. だいたいにおいて自分に満足をしている。
5. 学校は楽しい。
6. 自分には我慢できるところがあまりない。*
7. 少なくとも人並みには、価値のある人間である。
8. 授業で質問を答えることが好きだ。
9. 学校でのことで心配なことがある。*
10. 学校では泣きたい気持ちになる。*
11. 他の子たちは私に意地悪だ。*
12. 級友は私をからかう。*
13. 失敗することが怖い。*
14. 私は傷つきやすい方だ。*
15. 私はたくさん友人がいる。
16. 他の子が私をゲームにいれてくれるとしても、いつも最後だ。*
17. 学校で行儀よく振舞っている。
18. クラスのルールを守る。
19. 学校では人に期待されているようなことをする。
20. 勉強している級友の邪魔をする。*
21. 私は自分自身を十分信頼できると感じる。
22. 人生に対して、不信感を感じることもある。*
23. 物事がうまくゆかなくなると、自分の中に引きこもってしまうことがある。*
24. 自分自身のことが信頼できないと感じることもある。*
25. クラスで困っている。*

(*は逆転項目を示す)

資料2.

2009.7.6

愛知東邦大学 肥田幸子
スクールカウンセラー 鈴木美樹江

1年*組**先生

本年度は、不適応になる可能性の高い生徒を早期に発見することを目的として、メンタルヘルス調査を実施いたしました。それらの生徒を注意深く見守り続けることで、メンタル面での問題の発生を抑え、不登校からの中途退学防止に役立つものと考えています。また、来年度以降に更なるより良い調査を実施すべく、該当しました要支援生徒の状況を把握したいと思っております。お忙しい中、お手数をおかけ致しますが、ご協力の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

今回のメンタルヘルスでチェックした6つの心理的側面

1. **自尊心**：自己の能力と価値について肯定的な感覚のことです。自尊心が低い場合は自分に自身がなく、周りの評価に流されやすい傾向を持ちます。また、自信がないがために学力が低下することや、積極的に行動することを避けることもあります。
2. **学校への関心**：学校への関心が低い場合、欠席数が多いことや、授業や部活動への主体的な参加が低い傾向が見られる場合があります。
3. **不安**：不安が高い生徒は、些細なことでも傷つきやすい状態にあります。その結果、悩みを抱えやすく、顔色が優れないことや、体調不良を訴える場合があります。
4. **友人関係能力**：友人関係能力が低い場合、友人への不信感が強かったり、友人関係の築き方が分からないために、孤立したり、問題を起こす場合があります。
5. **規則を守る力**：規則を守る力が低い場合、不安を行動で表します。例えばクラスの規則を破る、他の生徒の気持ちを考えずに行動に移してしまうこともあります。
6. **基本的信頼感**：人や自分に対しての信頼感を示します。基本的信頼感が低い場合、何か出来事があった時に、落ち込みやすく、立ち直るのに時間がかかります。

以下の生徒はメンタルヘルス調査時に、いくつかの項目で要注意の指標が出た生徒です。ただ、これは本人が申告した問題点です。現在、先生が見られていかがでしょうか。項目については上記の表をご参照いただき、数字にチェックをお願いします。最後に、各個人について簡単なコメントを頂きたいと思います。

また、それ以外に、クラスで気になっている生徒がいればご記入ください。

問題がある3	やや問題がある2	ほとんど問題はない1	問題はない0
--------	----------	------------	--------

